



この地域にあって身近に親しまれている山や、はるかに望む山々について、まつわる歴史や文化を紹介します。



▲岩滝山全景

【岩滝山（いわたきやま）】

標高291M

山之上地区と川辺町の境にあり、昭和初期には「濃飛十勝」の旧跡にも選定された岩滝山。その形は市内どこからでもよく眺められ、鬼にまつわる伝説から「鬼飛山」の別名でも親しまれています。

この山は何より、臨済宗中興の祖といわれる江戸時代の名僧・白隠慧鶴（1685～1768年）ゆかりの地として広く知られる場所です。

正徳4（1714）年、30歳で美濃を訪れた白隠は翌年にこの山へとたどり着き、約1年9カ月にもおよぶ厳しい修行を続けました。中腹にある「坐禅岩」（市指定史跡）は、白隠が日々この上で坐禅をしたと伝わる巨岩で、この修行で重要な気付きを得たことが白隠の生涯をまとめた『白隠禅師年譜』などに記されています。83歳で大往生を遂げるまで布教に身を捧げた白隠の不屈の精神力は、ここでの体験に養われた部分が大きいかもしれません。

しかし修行は決して独力ではなく、有力者・鹿野善兵衛をはじめとした村の人々の大きな援助がありました。その交流は白隠が岩滝山を



▲坐禅岩（市指定史跡）

発った後も続き、晩年になってもこの地に深く思いを寄せていたことが、山之上の家々に伝わる禅画や手紙から分かります。この山は現在、白隠禅師顕彰会をはじめとした地域の人々によって大切に管理・整備され、人々の心に残り続けています。

昭和時代の正眼寺住職・梶浦逸外はその著作の中で、白隠がいたころの山之上村を、まさに「山之上」という名にふさわしい「行けども行けども、小巒低峯（小さな山）が重なり合って、殆ど旅人の影を見ることが出来ない、山と山との別天地」と称しています。

村の様相は昔と大きく変わりましたが、今も坐禅岩からは、白隠が見た風景が目の前に広がっています。

【参考文献】

- ・『山之上村に於ける白隠禅師（梶浦逸外著：1955年）』
- ・『展示図録 まちのいいものよ！—山之上—展（美濃加茂市民ミュージアム…2017年）』
- ・『展示図録 墨痕に咲く—美濃の禅画の世界 白隠と仙厓と—（美濃加茂市民ミュージアム…2022年）』